

古代出羽国の形成と諸段階

交流・交通の視点から

三 上 喜 孝

(文化システム専攻歴史文化領域担当)

はじめに

山形県が史上に登場するのは、持統三年(六八九)に、陸奥国優嶺曇(評)の城養(きこう)の蝦夷の出家を許した、という『日本書紀』の記事である。優嶺曇とは「うきたむ」であり、現在の置賜地域である。この時すでにこの地域に仏教が普及していたことも興味深いが、置賜地域が陸奥国に属していた点に注意したい。

その後、和銅元年(七〇九)に越後国に出羽郡ができる。これが現在の庄内地方である。この頃、城柵である出羽柵が設置されたものと思われる。さらに和銅五年(七一三)、出羽郡が出羽国として分立する。このとき同時に陸奥国最上・置賜の二郡を出羽国に移管することになる(同様の記事は七二六年の記事にもみえる)。かくして、日本海側の庄内地方と、内陸地域が合併し、出羽国が成立するのである。その後、八八六年には最上郡が二郡に分割され、南部が最上郡、北部が村山郡となる(現在の山形県に内陸北部が最上郡、南部が村山郡となるのは近世以降である)。

以上のようにみていくと、山形の地域社会は奈良時代から平安時代にかけて複雑な変遷をたどっていることがわかる(表)。ではその歴史的背景や影響はどのようなものであったのか。本稿では古代出羽国の形成とその歴史的変遷を、交流・交通の視点から考えてみることにしたい。

一 古代出羽国の形成と交通

近年では、古代の交通路の研究が進み、出羽国内での駅路や駅の比定や変遷に関する研究が進んでいる『山形県史 原始・古代・中世編』、高桑弘美・二〇〇四、中村太一・二〇〇三など(図1)。近年の研究をふまえて、古代出羽国の形成を交流や交通の面から考えてみたい。

八世紀の律令国家は、七道制といって、畿内(都を中心とする地域)を除く全国を七道(東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道)とする行政区画を制定した。出羽国は東山道に所属することになるが、じつは成立当初は、北陸道に所属していたと考えられている(中村・二〇〇三)。その根拠となるのは以下の史料である。

【史料1】天平四(七三二)年越前国郡稻帳(正倉院文書)

従出羽国進上御馬伍匹 経玖箇日 飼秣料稻玖拾束 匹別二束 江沼郡

これは、出羽国の進上する馬が越前国(福井県)を通過していることを記しているが、このことは、出羽国が北陸道ルートで平城京に通じていたことを示している。また、以下のような史料もある。

【史料2】『令集解』関市令弓箭条所引古記

古記云、東辺北辺、謂陸奥出羽等国也。

「古記」とは七三八年頃に成立した大宝令の注釈書だが、ここでは「陸奥」を「東辺」、「出羽」を「北辺」としており、出羽国を、平城京からみて北にある地域と認識していたことがわかる。

そもそも、陸奥国のエミシは「蝦夷」と表記し、これは「東夷」すなわち「東」という意識があつたことがうかがえるのに対して、出羽の国のエミシは当時「蝦狄」と表記され、「北狄」すなわち「北」という意識があつたことが史料上から確認できる。このことから、出羽国は当初北陸道に編入されていた可能性が高いのである。

その後、陸奥国から村山・置賜の二郡が編入されたことや、大野東人により陸奥国と出羽国を結ぶ交通路が開削されたことなどにより、八世紀中頃に東山道に編入されたと考えられる。

【史料3】『続日本紀』天平九年（七三七）正月二十二日条

先是、陸奥按察使大野朝臣東人等言、從陸奥国達出羽柵道經男勝、行程迂遠。請征男勝村以通直路。於是詔持節大使兵部卿從三位藤原朝臣麻呂、副使正五位上佐伯宿祢豐人・常陸守從五位上勳六等坂本朝臣宇頭麻佐等、發遣陸奥国。判官四人。主典四人。

（これより先、陸奥按察使大野朝臣東人等言す、「陸奥国より出羽柵に達するに、道、男勝を経て、行程迂遠なり。請うらくは、男勝村を征し、以て直路を通さんことを。ここにおいて、持節大使兵部卿從三位藤原朝臣麻呂、副使正五位上佐伯宿祢豐人・常陸守從五位上勳六等坂本朝臣宇頭麻佐らに詔して、陸奥国に發遣す。判官四人。主典四人。」）

このとき、天平五年の出羽柵移転により、陸奥国から出羽柵まで通じる内陸陸路を開通させるといふ大野東人の進言を受け、藤原麻呂以下が發遣された。そして同年四月十七日条には、この交通路開削についての一連の動きを知ることができる。以下、史料にもとづき、月日をおってその様子をみてみよう。

【史料4】『続日本紀』天平九年（七三七）四月十四日条

遣陸奥持節大使從三位藤原朝臣麻呂等言。以去二月十九日到陸奥多賀柵。与鎮守將軍從四位上大野朝臣東人共平章。且追常陸・上総・下総・武藏・上野・下野等六国騎兵惣一千人。聞山海兩道夷狄等咸懷疑懼。仍差田夷遠田郡領外從七位上遠田君雄人、遣海道、差歸服狄和我君計安曇、遣山道。並以使旨慰諭鎮撫之。仍抽勇健一百九十六人委將軍東人。四百五十九人分配玉造等五柵。麻呂等帥所余三百卅五人鎮多賀柵。遣副使從五位上坂本朝臣宇頭麻佐鎮玉造柵。判官正六位上大伴宿祢美濃麻呂鎮新田柵。国大掾正七位下日下部宿祢大麻呂鎮牡鹿柵。自余諸柵依旧鎮守。廿五日、將軍東人從多賀柵發。三月一日、帥使下判官從七位上紀朝臣武良士等及所委騎兵一百九十六人、鎮兵四百九十九人、当国兵五千人、歸服狄俘二百卅九人從部内色麻柵發。即日に出羽国大室駅。出羽国守正六位下田辺史難破將部内兵五百人。歸服狄一百卅人。在此駅相待。以三日、与將軍東人共入賊地且開道而行。但賊地雪深馬芻難得。所以雪消草生、方始發遣。同月十一日、將軍東人迴至多賀柵。自導新開通道惣一百六十里。或尅石伐樹、或填澗疏峯。從賀美郡至出羽国最上郡玉野八十里、雖惣是山野形勢險阻、而人馬往還無大艱難。從玉野至賊地比羅保許山八十里、地勢平坦無有危嶮。狄俘等曰、從比羅保許山至雄勝村五十余里、其間亦平。唯有兩河。每至水漲並用船渡。四月四日、軍屯賊地比羅保許山。先是、田辺難波狀備、雄勝村俘長等三人來降。拜首云、承聞官

軍欲入我村、不勝危懼。故來請降者。東人曰、夫狄俘者其多姦謀。其言無恒。不可輒信。而重有歸順之語。仍共平章。難破議曰、發軍入賊地者、為教喻俘狄築城居民。非必窮兵殘害順服。若不許其請、凌壓直進者、俘等懼怨遁走山野。勞多功少、恐非上策。不如示官軍之威從此地而返。然後、難破訓以福順、懷以寬恩。然則城郭易守。人民永安者也。東人以爲然矣。又東人本計、早入賊地、耕種貯穀。省運糧費。而今春大雪倍於常年。由是不得早入耕種。天時如此。已違元意。其唯營造城郭一朝可成。而守城以人、存人以食。耕種失候、將何取給。且夫兵者、見利則為、無利則止。所以引軍而旋、方待後年始作城郭。但為東人自入賊地、奏請將軍鎮多賀柵。今新道既通、地形親視。至於後年、雖不自入可以成事者。臣麻呂等愚昧、不明事機。但東人久將辺要、叢謀不中。加以親臨賊境、察其形勢、深思遠慮。量定如此。謹錄事狀、伏聽勅裁。但今間無事、時屬農作。所發軍士且放且奏。（遣陸奥持節大使從三位藤原朝臣麻呂等言す。「去る二月十九日を以て陸奥國の多賀柵に到る。鎮守將軍從四位上大野朝臣東人と共に平章す。且た、常陸・上総・下総・武藏・上野・下野等の六國の騎兵惣べて一千人を追す。山海兩道の夷狄等、咸く疑懼を懷くと聞く。仍りて田夷遠田郡領外從七位上遠田君雄人を差して海道に遣わし、歸服狄和我君計安壘を差して山道に遣わす。並に使の旨を以て慰諭しこれを鎮撫す。仍りて勇健なるもの一百九十六人を抽きて將軍東人に委ぬ。四百五十九人を玉造等の五柵に分配す。麻呂等余る所の三百卅五人を帥いて多賀柵を鎮む。副使從五位上坂本朝臣宇頭麻佐を遣わして玉造柵を鎮む。判官正六位上大伴宿禰美濃麻呂をして新田柵を鎮む。國の大掾正七位下日下部宿禰大麻呂をして牡鹿柵を鎮む。自余の諸柵は旧に依りて鎮守す。廿五日、將軍東人多賀柵より發つ。三月一日、使下の判官從七位上紀朝臣武良士等、及び委ねる所の騎兵一百九十六人、鎮兵四百九十九人、當國の兵五千人、歸服

狄俘二百卅九人を帥いて、部内色麻柵より發つ。即日、出羽國大室駅に到る。出羽國守正六位下田辺史難破、部内の兵五百人、歸服の狄一百卅人を將いて、此の駅に在りて相待つ。三日を以て、將軍東人と共に賊地に入る。且つ道を開きて行く。但し賊地雪深く馬獨得難し。所以に、雪消え草生えて、方に始めて發し遣す。同月十一日、將軍東人廻りて多賀柵に至る。『自ら新開の通道惣べて一百六十里を導く。或いは石を剋り樹を伐り、或いは澗を填め峯を疏る。賀美郡より出羽國最上郡玉野へ至る八十里、惣べて是れ山野の形勢險阻なると雖も、人馬の往還、大いなる艱難無し。玉野より賊地比羅保許山へ至る八十里、地勢平坦にして危嶮有ること無し。狄俘等曰く、比羅保許山より雄勝村へ至る五十余里、其の間も亦た平なり。唯だ両河有り。水漲るに至る毎に、並に船を用いて渡る。』四月四日、軍、賊地比羅保許山に屯す。これより先、田辺難波の狀に倂く、雄勝村の俘長等三人來り降りて、拜首して云く、承りて聞くには、官軍我が村に入らんと欲すと。危懼に勝えず。故に、來りて降らんとを請う。と。東人曰く、夫れ狄俘は、甚だ姦謀多く、其の言恒無し。輒く信ぜばからず。而れども重ねて歸順の語有らば、仍りて共に平章せん。と。難破議りて曰く、軍を發して賊地に入るは、俘狄を教諭し、城を築き民を居らしめんがためなり。必ずしも兵を窮めて順服するものを殘害するに非ず。若し其の請いを許さずして、凌ぎ圧して直進せば、俘等懼れ怨みて山野に遁走せん。勞多く功少なく、恐らくは上策に非ず。如かじ、官軍の威を示し、此の地より返らんには。然る後、難破、訓うるに福順を以てし、懷くるに寬恩を以てせん。然れば則ち、城郭守り易く、人民永く安んずるものなりと。東人、以て然りとす。また東人の本計は、早く賊地に入り、耕種して穀を貯え、糧を運ぶ費えを省かんとす。而るに今春の大雪、常年の倍なり。是に由りて早く耕種に入ることを得ず。天の時此の

如し。已に元意に違つ。其れ唯、城郭を营造すること、一朝に成すべし。而るに城を守るには人を以てし、人を存すには食を以てす。耕種、候を失いて、將た何をかりて給わん。且は夫れ兵は利を見て則ち為し、利無くば則ち止む。所以に、軍を引いて旋らし、方に後年を待ちて、始めて城郭を作らん。但し、東人自ら賊地に入らんが為に、將軍として多賀柵を鎮めんことを奏し請う。今、新道既に通い、地形親ら視る。後年に至らば、自ら入らずと雖も、以て事を成すべし』と。臣麻呂等愚昧にして、事機明らかならず。但し東人久しく辺要に將として、謀中らざること慚し。加以、親ら賊の境に臨み、其の形勢を察し、深く思い遠く慮りて、量り定むること此の如し。謹みて事の状を録し、伏して勅裁を聴う。但し今間は事無く、時、農作に属けり。発する軍士、且は放ち且は奏す』と。）

以上の記事にみえる大野東人の行動を、月日にしたがってまとめると次のようになる。

二月二十五日 多賀柵を発して色麻柵（宮城県中新田町）に到着。部下を派遣して新道の開通工事を行わせる。

四月一日 大野東人は色麻柵を発して大室駅（山形県尾花沢市）に到着。

四月三日 賊地に入り、翌日、比羅保許山（秋田・山形・宮城県境の神室山か）で駐屯。

四月十一日 進軍を断念して多賀柵に帰還。

この後、開削した駅路については、以下のような記述がある。

【史料5】『続日本紀』天平宝字三年九月己丑条

始置出羽国雄勝・平鹿二郡、玉野・避翼・平戈・横河・雄勝・助河

并陸奥国嶺基等駅家。

（始めて出羽国雄勝・平鹿二郡、玉野・避翼・平戈・横河・雄勝・助河、并陸奥国に嶺基等の駅家を置く。）

各駅の擬定地は、次の通りである。

玉野駅：北村山郡玉野村（現尾花沢市、「大室駅」と同一か）。

避翼駅：舟形町付近

平戈：金山町付近

横河：雄勝町内の横堀・寺沢付近

雄勝：雄勝郡内

助河：不明

かくして東山道側からのルートが確保されたことにより、東山道への編入が可能となったのである。

ただし、これはあくまでも陸奥国側から出羽柵に通ずる道路の開削という意味であり、当然のことながらこれ以前にも陸奥側からの陸路が存在していたことはいうまでもない。そもそも置賜、最上の二郡は陸奥国に所属していたのであり、陸奥側との陸路が古くから存在していたとみなければならぬ。

置賜地域で最初に政治的拠点が形成されるのは、高畠町周辺である。

とりわけ安久津八幡周辺は、群集墳の存在から七世紀段階における政治勢力の存在が想定できる。

置賜地域の交通路については文献史料上にはほとんどあらわれないが、安久津八幡周辺が、陸奥側から二井宿峠を経て山形に至る街道沿いであり、峠を下りて最初にひらけた地域にあたる。さらに安久津八幡の南方には七世紀後半代の集落遺跡である大在家遺跡の調査が高畠町により行われ、県内最古の須恵器窯跡といわれる高安窯跡の調査が高畠町や東北芸術工科大学によって行われるなど、七世紀代の生産遺跡、集落遺跡が

数多く確認されている。官衙関連の遺跡は今のところ確認されていないが、周辺には「小郡山」という地名も残っており、『日本書紀』にみえる陸奥国優嶺曇郡（評）の郡（評）家は、安久津周辺にあった可能性が高い（川崎利夫・二〇〇三）。こうした点からも、陸奥側からのルートとして、古くから二井宿峠が利用されていたことは間違いないだろう。

また、奈良時代に開削されたルートも、最終的には延喜式の駅路としては採用されず、実際には最上駅（山形市）を経由するいわゆる笹谷街道ルートが採用されることになる。これは、最上駅（現山形市内）を経由することが重視されていたことを意味しており、最上郡が陸奥国所管であった歴史的背景と無関係ではないだろう。

【史料6】『延喜式』諸国駅伝馬条

出羽国駅馬 最上十五疋、村山、野後各十疋、避翼十二疋、佐芸四疋、船十隻、遊佐十疋、蛸方、由理各十二疋、白谷七疋、飽海、秋田各十疋、伝馬 最上五疋、野後三疋、船五隻、由理六疋、避翼一疋、船六隻、白谷三疋、船五隻、

一方、東山道編入以後も、出羽国内では、北陸道ルートが存在していたと想定される。そのことを示しているのが、山形県鶴岡市山田遺跡出土木簡である（山形県埋蔵文化財センター・二〇〇一）（図2）。

【史料7】山形県鶴岡市山田遺跡出土木簡

・ 駅駅四皿駅子人
・ 大辟マ 麻績マ 長浴マ 六人
大伴マ 大日子マ 小長浴マ 六人

（二四五）×四六×三 〇一九型式

この木簡は、オモテ面に「駅子人」の表記がみえ、ウラ面にはウジ名のみを記した歴名が列記されている。おそらくは駅子人たちに食料を支給した際の記録簡であろう。「駅子」とは、駅戸から徴発された壮丁のことと、駅馬による駅使の通送、駅馬の飼養に従事した人々をさす。

この木簡の出土により、出羽国田川郡にも「駅」の存在が確認された。だが『延喜式』には、ここに駅が存在していたことは記載されていない。むしろこの地に駅が存在していたことは、陸奥国側からではなく、北陸道の越後国から、出羽国府に連絡する古代道が存在していたことを示している（図3）。

古代交通路の研究は、ともすれば文献史料にみえる官道や駅を重視するあまり、それ以外のルートの存在を軽視しがちだが、近年の出土文字資料の発見などで、文献にはあらわれない駅路の存在が確認されることもある。今後は、遺跡との関係に留意しながら交通路の復元を行っていくことが必要であろう。

一一「狄」の史料からみた出羽国の交流

ところで、出羽国のエミシに対して使われる「狄」の呼称は、新潟県新潟市の場遺跡出土の木簡に「狄食」と記されたものがあつたように、本来は北陸道に存在するエミシに対して広く使われていた。一方出羽国においても、東山道に編入された以降も、国内のエミシを北方の「狄」という意識が、平安時代まで続くことになる。

【史料8】『類聚国史』巻八三、延暦十一年（七九二）十一月二十八日

永免出羽国平鹿・最上・置賜三郡狄田租。

（永く出羽国の平鹿・最上・置賜三郡の蝦夷の狄の田租を免す）

「ここでははつきりと出羽国のエミシを「狄」と表記している。最上、置賜二郡はかつての陸奥国だが、出羽国編入以降、ここに居住するエミシに関しては「狄」と認識されるようになったことを示している。

【史料9】秋田県秋田市秋田城跡出土第七一号木簡『秋田市史』

・「八月廿五日下午狄饗料 二條 ×

・「 田川 荒木真 ×

(一二五) × 二六 × 三〇三八型式

「狄饗料」とは、狄をもてなすための食料や禄物を支給する(これを饗給という)物品を指している。裏面には田川郡の「荒木真×」という人物名が記載されている。「狄饗料」の下の物品名は判読不明とされているが、鐘江宏之氏はこれを「藁」と読み、田川郡から貢進された「藁」が、狄饗料として秋田城で消費されたことを示す木簡とみている。さらに山形県飽海郡遊佐町の大坪遺跡からは、

【史料10】山形県遊佐町大坪遺跡出土木簡

潤三月九日軍 録補役 伴咋万呂藁^(補)二役

目代真養二役 マ

真 □ □

(三三三) × 五二 × 八〇一九型式

という木簡が出土しており(山形県埋蔵文化センター・一九九五、庄内地方(田川郡、飽海郡)で実際に「藁」が生産されていたことを示す史料として注目している(鐘江宏之・二〇〇四)。「藁」とは、『類聚名義抄』では「カツラ」と読み、古代においては甘味料として利用され、「甘葛煮」と呼ばれる。『延喜式』(大膳下)の諸国貢進菓子条には、出羽国

から中央へ「甘葛煮」が貢進されていたことが知られる。出羽国内で生産された甘葛煮の一部は秋田城にもたらされ、狄の饗給にも消費されたのである。これは、「藁」を通じた生産地と消費地との交流の実態をうかがうことのできる稀有な例といえよう。

【史料11】秋田県仙北町払田柵跡出土木簡(払田柵跡) 古代出羽国の城

柵のひとつ)

具 狄藻肆拾

「狄藻」とは聞き慣れない言葉だが、これを「えびすめ」と読めば、昆布の意味になる。エミシが律令国家に昆布を貢進したことは有名だが、出羽国ではこれを「狄藻」と表記したと考えられるのである(秋田県教育委員会・秋田県教育庁払田柵跡調査事務所・一九九七)。

これを昆布と考えた場合、内陸の払田柵跡に海産物の昆布が持ち込まれていたことになり、内陸と沿岸部との交流を物語る資料といえるだろう。

【史料12】山形県米沢市古志田東遺跡出土木簡

> 狄帯建一斛

これは一石の米俵に付けられた付札木簡である。年代は十世紀初頭頃と推定される。「狄帯建」は米を貢進した人物の名か、あるいは当時の米の品種名の一つか、議論が分かれるところだが(平川南・二〇〇三)、いずれにしても、十世紀以降にもなお「狄」の表記が使われていることは興味深い。出羽国は、律令国家の世界観の中で、北の果ての国と認識されていたのであり、それは地域社会においても主体的に認識されていたのである。

二 出羽国府の諸段階

次に、出羽国府の変遷についてみてみよう。出羽国が成立した当初、出羽国府は「出羽国出羽郡」（現在の庄内地方）に置かれていたが、設置当初の出羽国府の正確な位置については不明である。

さらに、八世紀の出羽国府をめぐっては、現在二つの説が分かれている。第一の説は、出羽国府は初めは庄内地方に置かれたが、天平年間に秋田城に移転し、さらに平安時代になって庄内地方に移転したとする、いわゆる「秋田城国府説」である。

秋田城は、秋田市高清水の丘陵上にあった古代の城柵で、山形県庄内地方にあった出羽柵を、天平五年（七三三）に移設したものである。近年、秋田市教育委員会によって発掘調査が進められており、近年の調査で漆紙文書、木簡、墨書土器といった文字資料が大量に出土している。

『続日本紀』によれば、天平五年（七三三）に出羽柵を庄内地方から「秋田村高清水岡」に移したとあるが、この時、同時に出羽国府の機能も庄内地方から秋田へと移ったのではないかと、というのがこの説の主張である。最近の調査で、行政にかかわる公文書が多数発掘されていることもこの説の根拠となっている。

第二の説は、出羽国府は一貫して庄内地方（出羽国出羽郡にあった）とする、いわゆる「秋田城非国府説」である。『続日本紀』にはたしかに出羽柵が移ったとあるが、出羽国府が移ったとは書かれていない。行政の中心である国府が出羽国の北端に移されるというのも考えにくい話である。やはりこれは出羽国内の軍事的機能のみが移ったのであり、行政機能は依然として庄内地方に置かれていたことを示すのではないかと、とする主張である。

現在のところ、両説が対立しており、結論が出ているわけではないが、今後の発掘調査の進展により、新たな展開を迎える可能性もある。

八世紀の出羽国府については議論が分かれるところだが、九世紀初頭ごろ、酒田市の城輪柵に国府が移転したと考えられる点については、ほぼ認められている。『日本三代実録』仁和三年（八八七）五月二十日条（後掲）によれば、「国府は井口の地に在り」とあり、延暦年中に移転したと記述されている。これが酒田市の城輪柵を指していると考えられている。

また、嘉祥三年（八五〇）の大地震で国府が壊滅的損害を受け、仁和三年（八八七）に「旧府近側高敞之地」に移転したとあるが、これが現在の八幡町の八森遺跡であるとする説が有力である。

「井口国府」の擬定地とされている城輪柵の東方約三キロメートルのところに、八森丘陵がある。別稿で論じたように（三上喜孝・二〇〇五）、この丘陵上に位置する八森遺跡は、八八七年に移転した出羽国府である可能性がある。付近には、国府付属の寺院である「観音寺」が所在していたと思われる地名や、四天王法の道場の痕跡と思われる古四王神社が存在しており、出羽国府の宗教的拠点でもあった。九世紀における境界の政治的拠点としての機能は酒田市周辺にあったことは間違いないものといえよう。ではさらにその後、国府はどうなったであろうか。

ここで注目したいのは、山形市鈴川町に所在する「印鑰神宮」である。周辺には印役町という町名も残っている。では、「いんやく」とは何であろうか。

現在でも全国各地に「印鑰神社」と呼ばれる神社が存在する。これは、国印と正倉の鑰（かぎ）、神社の印などを神体とする神社である。奈良時代、国印は国司が発行した文書に捺印され、鑰は不動倉の開閉に用いられた。平安時代になるとこれらが受領の権限を象徴するものとなり、印鑰を祀る殿舎が設けられた。これが印鑰神社である。国司の権限を示すものであるから、当然のことながら、国府近辺に印鑰神社として残る例が多いのである（木下良・一九七三、牛山佳幸・二〇〇〇）。

山形の場合も、ある時期、国府は庄内から内陸に移ったことを示して

いると考えられる。では、移転の時期はいつであろうか。これについても議論が分かれている。

第一の説は、延文元年（一二三六）、最上氏の祖、斯波兼頼が羽州探題として入部して以後、現在の山形市に国府が移転した、とする説である。従来はこの第一の説が通説とされてきたが、これに対して、移転の時期はもう少しさかのぼるのではないかとする第二の説もある。古代末（平安時代末）か中世（鎌倉時代）の早い時期に、内陸地方の最上郡域（山形市北部）に遷されたとする説（柏倉亮吉・川崎利夫・一九九一）である。その根拠となるのは、次の史料である。

【史料13】金銅造阿弥陀如来立像銘文（横浜市千手院蔵）『山形県史 古

代中世史料2』

「奉鑄 移善光寺本師一光三尊如来像

大願主 勸進上人 西阿弥陀仏

大歳

文永元年 九月十五日

丙寅

奉安置出羽国最上郡府中庄外郷石仏

文永元年は一二二六年にあたる。この史料によれば、石仏が安置された場所が「最上郡府中庄外（しょうげ）郷であつたとするが、現在、天童市に「清池（しょうげ）」という地名が残っており、庄外郷はこの付近を指すものとみられる。

ここで注目されるのは「府中」という言葉である。一般に「府中」とは、国府が置かれた場所を指す場合が多いので、この時期、国府が最上郡にあつた可能性があるのではないか、というのが第二の説の根拠である。

この第二の説は必ずしも広く認められている説ではないが、注目して

よい説だと思う。それは、九世紀段階ですでに、最上郡に出羽国府を移すという構想がみられるからである。

【史料14】『日本三代実録』仁和三年（八八七）五月二十日条

先是、出羽守従五位下坂上大宿祢茂樹言、国府在出羽国井口地。即是去延暦年中、陸奥守従五位上小野朝臣岑守、抛大將軍従三位坂上大宿祢田村麻呂論奏所建也。去嘉祥三年地大震動、形勢更改。既成窪泥。加之海水漲移、迫府六里所。大川崩壊、去隄一町余、兩端受害、無力堤塞。堙没之期在於旦暮。望請、遷建最上郡大山郷保宝士野、拋其險固、避彼危殆者。太政大臣・右大臣・中納言兼左衛門督源能有・參議左大弁兼行勘解由長官文章博士橘朝臣広相、於左仗頭、召民部大輔惟良宿祢高尚・大膳大夫小野朝臣春風・左京亮藤原朝臣高松等、問彼国遷府之利害。所言參差、同異難定。更召伊予守藤原朝臣保則、以高尚等詞問之。保則言、国司所請、非無理致。保則高尚等、元任彼国吏、応知土地之形勢。故召問之。太政官因国宰解状、討覈事情曰、避水遷府之議、雖得其宜、去中出外之謀、未見其便。何者、最上郡地在国南辺、山有而隔。自河而通、夏水浮舟、纔有運漕之利。寒風結凍、曾無向路之期。況復秋田雄勝城、相去已遙、烽候不接。又拳納秋饗、国司上下、必有分頭入部、率衆赴城、若沿水而往、泝水而還者、徵発之煩更倍於尋常、遞送之費、將加於黎庶。晏然無事之時、縱能兼濟、警急不虞之日、何得周施。以此論之、南遷之事、難可聽許。須折旧府近側高敞之地。閑月遷造、不妨農務。用其旧材、勿勞新採。官帳之數、不得増減。勅宜依官議、早令行之。

（これより先、出羽守従五位下坂上大宿祢茂樹言す、「国府は出羽国井口の地に在り。すなわち、これ去る延暦年中、陸奥守従五位上小野朝臣岑守、大將軍従三位坂上大宿祢田村麻呂の論奏に抛りて建てる

ところなり。去る嘉祥三年、地、大いに震動し、形勢変改して、既に窪泥と成る。しかのみならず海水漲移して、府に六里の所に迫る。大川は崩壊し、隍を去ること一町余なり。両端に害を受け、堤塞するに力無し。埋没の期、旦暮に在り。望み請うらくは、最上郡大山郷保宝土野に遷し建て、其の險固に拠り、彼の危殆を避けんことを」てえり。太政大臣〔藤原基経〕・右大臣〔源多〕・中納言兼左衛門督源能有・参議左大弁兼行勘解由長官文章博士橘朝臣広相、左仗頭において、民部大輔惟良宿祢高尚・大膳大夫小野朝臣春風・左京亮藤原朝臣高松らを召して、かの国の府を遷すの利害を問う。言うところを参差して、同異を定め難し。更に伊予守藤原朝臣保則を召して、高尚らの詞をもつてこれを問う。保則言す、国司の請うところ、理致無きにあらず。保則・高尚ら、もと、彼の国の吏に任せられ、土地の形勢を知るべし。故に召して問う。太政官、国宰の解状により、事情を討覈して曰く、「水を避けて府を遷すの議は、その宜しきを得ると雖も、中を去り外に出るの謀は、未だその便を見ず。何となれば、最上郡の地は国の南辺に在り、山有りて隔たり、河よりして通ず。夏は水に舟を浮かべて、纔かに運漕の利有れども、寒風に凍を結べば、曾て向路の期無し。況んやまた、秋田・雄勝城、相い去ること已に遙かにして、烽候接せず。また拳納・秋饗に、国司上下すること、必ず分頭して部に入り、衆を率いて城に赴くこと有り。若し水に沿いて往き、水を浜りて還らば、徴発の煩、更に尋常に倍し、通送の費は、將に黎庶に加わらん。晏然にして事無き時は、縦い能く兼済するも、警急・不虞の日は、何ぞ周施するを得ん。これを以てこれを論ずるに、南遷の事、聴許すべきこと難し。須く旧府の近側の高敞の地を択び、閑月に遷し造り、農務を妨げず、その旧材を用い、新採を勞することなかるべし。官帳の数は、増減すること得ざれ」と。勅すらく、「宜しく官議に依りて、早くこれを行わしむべし」

これによると、仁和三年（八八七）に、国府を内陸の「最上郡大山郷保宝土野」に移転したい、という申請が出されている。理由は嘉祥三年の大地震により国府が損壊したことに對し、これを避けるために国府の移転が必要であるという主張だが、これに對し中央政府は、最上郡の地は出羽国の南辺にあたること、山により隔てられ交通の便が悪い、などの理由からこの申し出を却下している。結局、この時国府は内陸に移転せず、「旧府の近側の高敞の地」、すなわちすぐ近くの高台に移転することになる。この時内陸に国府を移転できなかった背景には、元慶の乱後においても、なお出羽国内が緊迫した情勢であったことがあったのだろう。

では、移転の候補地となった「最上郡大山郷」とはどこであろうか。これについては、次のような説がある。

最上郡丹形町の福寿野に比定する説。

西村山郡河北町一帯とする説。

山形市北部とみる説。

このうち、説は、一九八一年に河北町畑中遺跡から「大山」「大山郷」と墨書された須恵器がみつかつており、さらに河北町北部に「法師川」「法師森」という地名があり、「保宝土野」に由来する地名と考えられることが根拠となっている（阿部明彦・二〇〇四）。また、『和名類聚抄』にみえる「村山郡大山郷」がこれにあたると考えると、当時村山郡域にあった 説が妥当といえる。

だが、この史料には「最上郡」と明記されており、しかも村山郡が前年の八八六年（仁和二）にすでに成立している点に注意する必要がある。「最上郡」の記載を重視すれば、説が注目されよう。中世になると、ここに「大山荘」という荘園が置かれ、「大山郷」が山形市北部を指している可能性も否定できないのである。

そもそも国府移転の候補地としてあげられる地域は、国府が置かれるにふさわしい条件を持った地でなければならないであろう。その点から

すれば、山形市北部はその条件を備えた地であるとも考えられるのである。そこで次にその点について確認してみよう。


四 内陸国府の前史

近年の発掘調査で、山形市北部、とりわけ須川と立谷川にはさまれた南側の地域で、奈良、平安時代の遺跡が密集していることが指摘されている〔阿倍・二〇〇四、須賀井明子・山口博之・二〇〇四〕（図4）。この地域は、中世に大山荘が置かれたとされる地域にあたる。

出土文字資料の観点からとりわけ注目される遺跡は、今塚遺跡（山形市今塚）である（山形県埋蔵文化財センター一九九四、植松暁彦・二〇〇三）。一九九三年に調査されたこの遺跡は、旧河川を中心に竪穴住居三〇棟、掘立柱建物跡九棟、井戸二基、土坑五三基、溝、畝など多数の遺構が検出され、墨書土器を含む土器類の他、木簡、斎串、皿、椀、曲げ物、篋、下駄、紡織具、建築部材、矢形、錐形、刀子形など木製品が多数出土した。遺跡の性格については現段階では不明だが、木簡の内容から何らかの官衙の存在を想定する必要がある。



【史料15】山形県山形市今塚遺跡出土木簡（図5）

第一号木簡

・  （奉行方） （長カ）
部「人雄」
「為」仁寿参年六月三日
・ 大 「浜カ」

第二号木簡

（二三四）×三〇×五 〇一九型式
「二斗四升四合 中津子二斗八升（天地逆）」
・ 毎二斗七升遺二斗三升

「酒世二斗四升四合」 （天地逆）
・ 五斗四升四合  五斗 子二斗 

第三号木簡

・ 七月一日始十日
斗 升二合

（八九）×（二三）×四 〇八一型式

木簡の内容に注目すると、第一号木簡は、仁寿三年（八五三）の年紀をもつ文書木簡の一部であり、何らかの行政命令が出されていたことがわかる。第二号木簡は、五斗俵からの米の支給額とその残額について記した記録簡であり、糧米の支給に関わるものと推定されている。文書木簡や米支給帳簿の存在は、この遺跡が単なる集落でなく、官衙遺跡であることを明白に物語っている。

今塚遺跡からは多数の墨書土器も出土している（図7）。墨書土器とは、土師器や須恵器といった古代の土器に文字や記号墨書したもので、全国各地の奈良、平安時代の遺跡から発見されている。山形県内でも三〇〇〇点以上の墨書土器がこれまで出土している。

今塚遺跡の墨書土器には、「一麗」「麗」「田宅」「調所」「伴」「高」「王」「丈」、記号などが書かれたものが見える。最も特徴的なのは「麗」と書かれたものだが、本来の字形を離れ、なかば記号化して書かれている点の特徴である。「符籙」（まじない記号）的な意味で書かれていたものと考えられる。

一方で、「田宅」「調所」などの施設名を記したものの、「一等書生」という職名（図6）、「伴」「丈」などの一文字を記したものなどが多数みられる。とくに、「調所」（税である「調」にかかわる施設）、「書生」（役所の書記官）といった記載がみられることからすると、この遺跡が国府と

強い関わりを持つ遺跡である可能性は大いに考えられる（村木志伸・二〇〇四）。つまり、九世紀ごろ、国府の出先機関が内陸部の山形市域に置かれていた可能性があるのである。

もう一つ、今塚遺跡で特徴的なのは、「伴」「丈」といった、一文字表記の墨書土器が多くみられることである。「伴」「丈」は、「伴部」「丈部」といった人名を一文字表記したものと思われる。

ではこうした「伴」「丈」とは、どういう人物であろうか。手がかりになるのは「一等書生伴」と書かれた人面墨書土器である。彼らは単なる白丁身分ではなく、「書生」などの下級の雑任であった人々であり、その結集の場が、この今塚遺跡だったであろう。木簡の存在、そして、ここに集う多数の雑任の存在は、この地の周辺がしかるべき官衙施設であったことを示している。

今塚遺跡は、立谷川と須川の合流点の南に位置し、水陸交通の要衝の地であったとみてよいであろう。最上川河川を使った水上交通を利用して、庄内と内陸を結ぶ交通の要衝地域に出羽国府の出先機関が存在していたとみてよいのではないだろうか。そしてこうした前史があつてはじめて、内陸への国府移転問題が浮上したものと考えられる。

以上のように考えると、国府を内陸に移転するという課題は九世紀末段階から構想されていたことであり、それが比較的早く実現した可能性も否定できないのではないだろうか。

山口博之氏は、最上郡に国府が比較的早く置かれた根拠として、次の事例をあげている（須賀井明子・山口博之・二〇〇四）。

【史料16】『綺語抄』 中 財貨部

いなふね いねつみたるふねなり。

もがみがはいではにあり。

もがみ河 のぼればくだる いなふねの

いにはあらず しばばかりぞ

もがみ川は、出羽国のたちのまへよりながれたる河也。それにたちへもいくに、かはのあまりはやくて、かまへてさしのぼりたればかくよめるなり。

【史料17】『袖中抄』 第十二

一、いなふね もがみ川

もがみ河 のぼればくだる いなふねの

いにはあらず この月ばかり

顕昭云、いなふねとはいねつみたる舟を云也。もがみ河は出羽国に最上郡あり。その郡よりながれたれば、もがみ河と云也。彼国の館のまへより流たり。その河よりこほりの物をば舟につみてたちにをさむれば稲をもつみてのぼる也。郡々のいな舟多ければのぼりくだる事数しらねば、のぼればくだるとは云、

『綺語抄』（藤原仲実著）は十二世紀初頭ごろ成立の、『袖中抄』（顕昭著）は文治年間成立の、いずれも十二世紀代に成立した歌学書である。山口氏が注目しているのは『袖中抄』の「もがみ河は出羽国最上郡にあり、その郡よりながれたれば、もがみ河と云也。彼国の館のまへより流れたり。その河よりこほりのものをば舟につみてたちにおさむれば稲をもつみてのぼる也。郡々のいな舟多ければのぼりくだる事数しらねば、のぼればくだるとは云」という部分である。これによれば、最上川は、最上郡より流れている川であるという。さらに出羽国の館の前から流れているともいう。そして国内の諸郡のものを舟に積んで、この館におさめるという。このとき、「稲をもつみてのぼる也」と表現している。ここから、ここでいう「出羽国の館」が、庄内ではなく、内陸の最上郡にあったと認識していたことが明らかになる。そして、各郡からは稲が

運ばれると記しており、郡から進上された稲穀類が国の館に運ばれる様子がうかがえる。

こうした歌字書の記述がどの程度現実をふまえているのかについてはきわめて慎重でなければならないが、ただ興味深いのは、国の館が、河川交通の要衝にあるかのように記述されていること、そして、国の館には、諸郡から貢進された稲が舟運によりもたらされたと考えられていたことである。この記述から思い起こされるのは、新潟県中条町の蔵の坪遺跡で出土した次の木簡である。

【史料18】新潟県中条町蔵ノ坪遺跡出土木簡

・「少目御館米五斗」

・「所進」

一一〇×一九×四 〇五一型式

蔵ノ坪遺跡は、日本海に面した塩津潟（紫雲寺潟）の北東端に位置し、水陸交通の要衝に位置する、八世紀後半から九世紀後半にかけての遺跡である。古代越後国の、沼垂郡あるいは磐船郡の地域と考えられている〔平川南・二〇〇四〕。発掘調査により、幅七～一四メートルの河道跡や、一六棟の掘立柱建物跡が検出された。この遺跡からは「津」と書かれた墨書土器も出土しており、この地が港湾施設としての機能を持った遺跡であることが確認できる。問題の木簡は、川跡から出土した完形の荷札木簡であり、九世紀後半のものと考えられている。木簡の形状や内容から、国司の少目（第四等官）の「御館」に、米五斗を進上した際に付けられた荷札木簡であり、「少目御館」に納められたのち、荷札がはずされ投棄されたものと考えられる。つまりこの遺跡から見つかったということとは、この付近に「少目御館」が存在していたことをうかがわせる。このとき、越後国府は上越（越後国南西部）の頸城郡に所在していたが、少目の御館は下越（越後国北東部）にも置かれていたのである。おそら

く国内の水陸交通の要衝には、国司の館が置かれており、そこでは近隣の諸郡や諸郷から貢進された公廩米などの稲穀類が舟運などにより集積されていたのであろう。

ひるがえって今塚遺跡を考えてみると、五斗俵から米を支給したことを記録したと考えられる木簡が出土しており（二号木簡）、この遺跡の周辺で五斗俵が集積されていたことが確認できる。今塚遺跡周辺の地域が国司の館として機能していた可能性をうかがわせるものといえよう。ただ、単に数ある収納施設の一つであつたというだけにとどまらず、そこには書生などの末端官人も多く結集しており、内陸部の政治的拠点としても機能していた可能性がある。こうした機能を持つ館の存在が、内陸国府への移転問題に何らかの影響をあたえたのではないだろうか。

おわりに

以上、古代出羽国の交通や交流といった視点から、出羽国の形成と出羽国府の諸段階について検討を試みた。北陸道と東山道、沿岸部と内陸部といった地域性の変遷が、古代出羽国の歴史的特質を形成していったものと思われる。

本稿では、比較的早い段階から、出羽国内における南半部内陸地方が政治的拠点として注目されていたという可能性を考えてみた。国府が庄内地方から内陸に移る歴史的意義としては、対蝦夷防衛施設としての国府の役割が希薄化したことがまずあげられよう。また、陸奥国との連絡陸路が整備されたり、庄内地方との最上川水運が充実した、というような、交通上の問題があげられるだろう。さらに、荘園の増加などに見られる、内陸の生産力の増大といった事態も想定できるだろう。いずれにしても、今後とも、内陸地域の歴史的変遷について引き続き注目していかなければならないと考える。

〔引用文献〕

- 『山形県史 原始・古代・中世編』
阿部明彦 二〇〇四 「考古学から見た古代村山郡の成立と展開」『最上川文化研究』二
植松暁彦 二〇〇三 「今塚遺跡の再検討とその性格について」『研究紀要』創刊号、財団法人山形県埋蔵文化財センター
牛山佳幸 二〇〇〇 『小さき社』の列島史』平凡社
柏倉亮吉・川崎利夫 一九九一 「出羽」『新修国分寺の研究 第三巻 東山道と北陸道』吉川弘文館
鐘江宏之 二〇〇四 「書評・平川南著『古代地方木簡の研究』」『木簡研究』二六
川崎利夫 二〇〇三 「置賜地域における郡衙の変遷について」『米沢史学』一九
木下良 一九七三 「印鑰社について 古代地方官庁跡所在の手掛かりとして」『史元』一七
高桑弘美 二〇〇四 「出羽国・山形県」『日本古代道路事典』八木書店
中村太一 二〇〇三 「陸奥・出羽地域における古代駅路とその変遷」『国史学』一七九
平川南 二〇〇三 『古代地方木簡の研究』吉川弘文館、二〇〇三年
平川南 二〇〇四 「古代越後の磐船郡と沼垂郡 新潟県中条町屋敷遺跡出土木簡から発して」『越後佐渡の古代ロマン 行き交う人々の姿を求めて』新潟県立歴史博物館
三上喜孝 二〇〇五 「古代の辺要国と四天王法」についての補論』『山形大学歴史・地理・人類学論集』六
村木志伸 二〇〇四 「出土文字資料からみた今塚遺跡」『人面墨書土器からみた東国の祭祀』
財団法人山形県埋蔵文化財センター 一九九四 『山形県埋蔵文化財

センター調査報告書第7集 今塚遺跡発掘調査報告書』

財団法人山形県埋蔵文化財センター 一九九五 『大坪遺跡第2次発掘調査報告書』

財団法人山形県埋蔵文化財センター 二〇〇一 『山田遺跡発掘調査報告書』

須賀井明子・山口博之 二〇〇四 「古代出羽国郡郷名『最上』を記す墨書土器」『山形考古』七 四

秋田県教育委員会・秋田県教育庁弘田柵跡調査事務所一九九七『秋田県文化財調査報告書第二六九集 弘田柵跡調査事務所年報一九九六 弘田柵跡』

〔付 記〕

本稿は、二〇〇四年度山形大学人文学部人文研究プロジェクト「交易・交流からみた出羽の歴史文化 山形の地域特性の歴史的形成に関するフィールド研究」による研究成果の一部である。研究会の席上で、阿子島功、岩田浩太郎、菊地仁、高橋良彰の諸氏から有益なご意見をいただいた。記して感謝申し上げたい。



図1 出羽国の駅路(高桑2004)

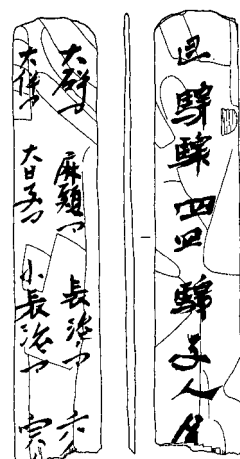
〔表・古代出羽国略年表〕

| | |
|-----------|--|
| 689(持統3) | 陸奥国優略 疊郡(評)の城養蝦夷の出家を許す。 |
| 709(和銅元) | 越後国に出羽郡ができる(山形県庄内地方)(この頃出羽柵が設置される) |
| 712(和銅5) | 出羽郡が出羽国として独立する。 陸奥国最上・置賜の二郡を出羽国に移管する(716年の記事にもみえる)。 |
| 714(和銅7) | 「陸奥国裳上郡」習書木簡(平城宮木簡)あり。 |
| 717(養老元) | 尾張・上野・信濃・越後等国の民200戸を出羽柵戸として移す。 |
| 719(養老3) | 信濃・上野・越前・越後四国の民各100戸を出羽柵戸として移す。 |
| 733(天平5) | 東海・東山・北陸道の民200戸を出羽柵に配する。 |
| 737(天平9) | 出羽柵を秋田村高清水岡に遷す。 |
| 759(宝字3) | 大野東人が陸奥と出羽を結ぶ連絡路を開く。 小勝柵(雄勝城)が造られる。 雄勝・平鹿二郡を新置し、玉野・避翼・平戈・横河・雄勝・助河の駅家を設置する。 〔この頃、出羽柵の改修工事が行われ、「阿支太城」と改称される。〕 |
| 804(延暦23) | 秋田城を停廃する。 〔この頃、出羽国府が「井口の地」(城輪柵(酒田市)か)に移転する〕 |
| 830(天長7) | 出羽国で大地震が起こり秋田城が倒壊する。 〔この頃、出羽国で疫病が流行する〕 |
| 837(承和4) | 出羽国最上郡に済善院が建立される。 |
| 850(嘉祥3) | 出羽国で大地震が起こる。 |
| 878(元慶2) | 元慶の乱(出羽国俘囚の反乱)が勃発し、秋田城が襲撃される。 |
| 886(仁和2) | 最上郡が二郡に分割され、北部が村山郡となる。 |
| 887(仁和3) | 出羽国府を最上郡大山郷保宝土野に移したいと奏上する。 |

※『日本歴史地図—原始・古代編(下)—』(柏書房)
より抜粋、加筆



図3 日本海沿岸の想定交通路(山形埋文2001)



一、釈文
「驛驛四血驛子人」
大伴マ 麻績マ 長浴マ 六人
大伴マ 大日子マ 小長浴マ 矢人
(245) × 46 × 3

図2 鶴岡市山田遺跡出土木簡(山形埋文2001)

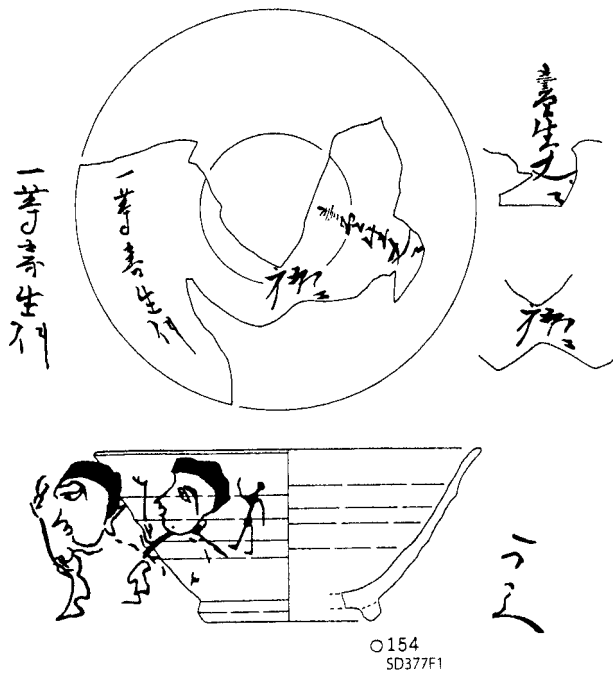


図6 今塚遺跡出土墨書土器(植松2003)

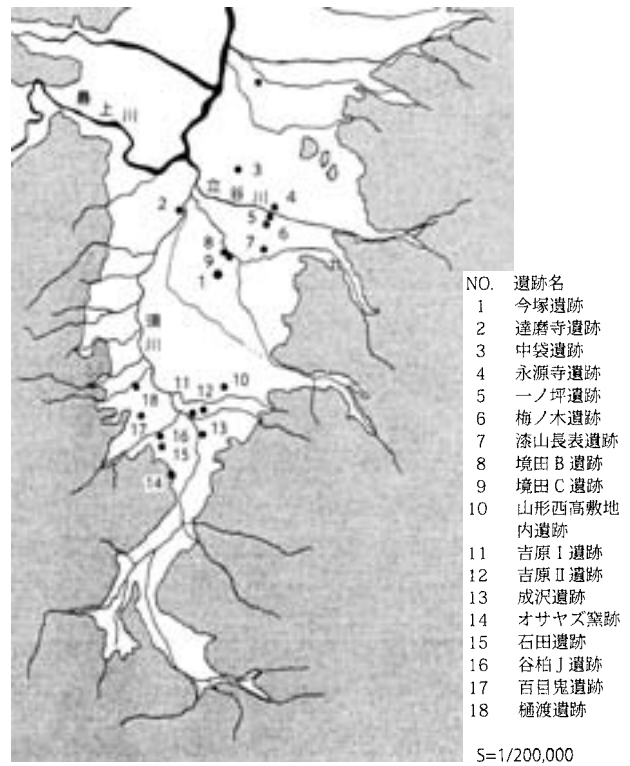


図4 今塚遺跡位置図(植松2003)



図5 今塚遺跡出土木簡(山形埋文1994)



図7 今塚遺跡の文字資料(植松2003)

The Formation and Transition of the Ancient "Dewa-no-kuni": From the Viewpoint of Trade and Communication

MIKAMI Yoshitaka

(Associate Professor, History & Culture, Cultural System Course)

This article explores the historical formation and transition of "Dewa-no-kuni" in the Ancient period in Japan from the viewpoint of trade and communication. "Dewa-no-kuni" had initially belonged to "Hokuriku-do" before it was subsumed under "Tousan-do." This fact suggests that "Dewa-no-kuni" had been regarded as the northern borderland by the central government in those times. It is also argued that "Dewa-kokufu (local government)," which had been originally settled at Shonai district on the Sea of Japan, was transferred to the midland area in the end of the Ancient period. It is shown that the Ancient "Dewa-no-kuni" had undergone a complex process of transition in its history.